兵庫県播磨町 60th
町制施行60周年
Harima-town 60th Anniversary

播磨町町制施行 60 周年・大中遺跡発見 60 周年記念

特別展

大中遺跡の祈りとくらし

－60年目の新発見－

令和 4（2022）年

播磨町郷土資料館

弥生時代後期の大中遺跡
女性シャーマン画：小東 憲朗

ごあいさつ

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見されて以来、発掘調査が行われ弥生時代の遺構や遺物が多数発見されました。これらの成果から、昭和42(1967)年には国指定史跡に指定されました。その後、遺跡公園として整備が進められ、多くの方々に親しまれています。今回60年の時を経て、遺物の見直し作業が進められ、その際に発見された出土品や復元資料により、弥生時代の祈りとくらしを分かりやすく展示します。

なお、本年は町制施行・大中遺跡発見60周年にあたり、これを記念して特別展を開催するものです。展示されました出土品等をご覧いただき、弥生人の祈りやくらしに想いを馳せていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にご協力賜りました関係機関と各位にお礼申し上げます。

令和4（2022）年10月　　播磨町郷土資料館　館長　井上　珠彦

例言・凡例

- この冊子は、令和4(2022)年10月8日(土)～令和4(2022)年12月4日(日)に開催する播磨町町制施行60周年・大中遺跡発見60周年記念特別展「大中遺跡の祈りとくらし －60年目の新発見－」の展示図録である。
- 本展は深井明比古(当館学芸員)が主担当し、大川康裕(当館主査・学芸員)が補佐した。
- 本文は深井が執筆した。なお、イラストはアプライドアート工房 小東憲朗が作成した。
- 展覧会の開催にあたっては、後述の機関並びに個人の方々にご協力・ご援助を賜りました。記して感謝の意を表します。

協力機関

兵庫県立考古博物館、兵庫県立考古博物館加西分館、大阪府立弥生文化博物館、田原本町教育委員会、神戸市、たつの市教育委員会、福岡市教育委員会、Danto Tile 株式会社

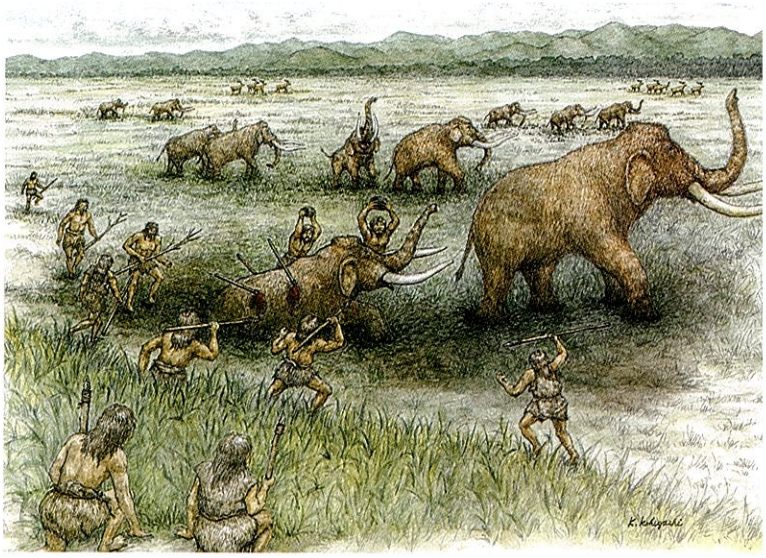
協力者（敬称略）

浅原重利、池田　毅、池田征弘、岸本道昭、久住猛雄、鐵　英記、鹿野　塁、篠宮　正、清水康弘、高瀬一嘉、多賀茂治、中　徳応、中村大介、藤原怜史、水野洋子、三好初実、村上賢治、森岡秀人、山田侑生、和田晴吾

大中遺跡のはじまり

土器が発明されていない2～3万年前は氷河期で瀬戸内は陸地となっていました。旧石器人は石器を木にくくりつけて狩りの道具を作り、季節移動するナウマンゾウやオオツノジカなどの狩りをしました。動物たちは季節移動する際に、大中遺跡・山之上遺跡の西側の低い場所を通ることを旧石器人は知っていたのでしょう。けもの道に大きな穴を掘り、沼のようにして、そこにはまったナウマンゾウを全員が力を合わせて仕留めたことでしょう。

獲物の動物は解体され、肉は食料、皮は服などに、骨は道具に加工されて余すところなく大切につかわれました。その際に使う道具は石器です。旧石器人はこれらの石器の道具袋に入れて大切にしていたと思われます。これらの石器が大中遺跡や山之上遺跡から見つかっています。



ナウマンゾウを狩る旧石器人　画：小東憲朗

発見・調査・そして60年

大中遺跡は昭和37(1962)年当時中学生だった浅原重利、大辻真一、大辻要二の3名により発見され60年が経過しました。その後、昭和37(1962)年12月から平成27(2015)年までの24次におよぶ発掘や整理作業が行われました。発掘の結果、遺跡は8万㎡で、弥生時代後期の竪穴住居跡が140棟以上確認され、大型や小型、円形、方形、長方形、多角形など、あたかも弥生時代の住宅展示場のように様々な形があることが特徴です。この他に多数土器とともに、内行花文鏡片、鳥形土製品、鏡形土製品、鉄製品などが出土したことが特徴です。調査成果は『播磨大中』『播磨大中遺跡の研究』など多数の報告書が刊行されるとともに、昭和42(1967)年には国史跡に指定されて播磨町のシンボルとして皆さんに愛され、文化財保護継承の場としても使われています。

初期の発掘調査風景（スコップを振るう学生参加者）

また、兵庫県立考古博物館では平成30(2018)年から「大中遺跡調査研究活用プロジェクト」を開催実施してきました。このプロジェクトの成果は令和4(2022)年4月に「弥生集落転生―大中遺跡とその時代」として明石川から加古川下流域の同時代の遺跡を考察し、学術的側面から展覧会が開催されました。その結果、大中遺跡が最も大きくなった弥生時代後期は自然災害、人口増加などにより周辺集落などが安全で広い場所に移ってきた可能性もあることなど、研究が進んでいます。

大中遺跡・山之上遺跡で見つかった竪穴住居跡『弥生集落転生―大中遺跡とその時代』2022 兵庫県立考古博物館を一部改変

60年の時を経て、見直しによる成果

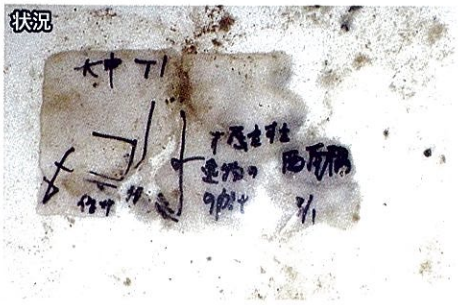
大中遺跡が発見されて間もなく、第１次発掘調査がはじまりました。当時は播磨町には埋蔵文化財専門職員はいなかったため、県教育委員会の職員が代表者となり、調査員として高校教諭であった上田哲也先生等が発掘を指揮しました。作業には大学生や高校生が作業にあたりました。その成果は『播磨大中』として報告書が刊行され、弥生時代後期から古墳時代初頭の大集落の実態が明らかになってきました。これらの大中遺跡出土品や郷土資料を収集・保管・研究・展示するため、昭和60(1985)年に播磨町郷土資料館が開館しました。それまで整備されていました「播磨大中古代の村」は地域住民の憩いの場として活用されています。

保管

郷土資料館敷地の西側にある倉庫の外側に大中遺跡の第１次～第11次発掘調査で出土した遺物がコンテナに入れられ、総数93箱は長期間にわたり保管されていました。風雨により水が溜まったり、太陽光によりコンテナに貼られたいつどの場所から出土したのかを示すラベルが読めないものが多数ありました。

選別

まずはコンテナのラベルが読めるのか、その中には何が入っているのかを確認する作業です。コンテナの中にはビニール袋に小さな破片の土器が詰められていました。袋内の紙のラベルは腐って読めないのも多数ありました。その結果、コンテナは第１次～第11次調査（昭和37～47(1962～1972)年頃）までのものであることが分かりました。


状況

袋中の遺物は土器の他、僅かに石器片や弥生時代以降の遺物が混ざっています。土器の多くは表面に土がこびりついて簡単には洗い落とせない状態です。そこで袋中の遺物全体が発掘時のままで土が多く付いているもの、袋内の土器のほとんどが表面に土がこびりついているもの、袋内の土器に土がこびりついているのが少ないものに分けました。左の写真は袋の中に入っていた遺物ラベルですが、湿度などでボロボロになっています。

水洗

水洗いは細心の注意をはらって、断面(割れ口)に付着した土を柔らかいブラシで叩き洗いします。そのあと表面や内面のこびりついた土を指や筆を使いながら丹念に洗います。表面の土が落ちたタイミングを失うと洗い過ぎになり、土器の表面の調整や文様が失われてしまうので、僅かに土がついているのでは・・・というところで止めます。

トライやる・ウィーク

播磨町立播磨中学校２年生８名がトライやる・ウィークで土器洗浄に挑戦しました。はじめは慎重に作業していましたが、コツを覚えて徐々に早く、確実に作業できるようになりました。中には絵画土器の可能性のある「ヘラガキ」を見つけた生徒もいます。

令和２（2020）６月年に郷土資料館倉庫に保管されている大中遺跡の報告書掲載以外の出土品を見直す機会があり、偶然にも弥生時代後期の土器片に描かれた龍の絵画土器が発見されました。細かな土器などが集められたコンテナが 93 箱あることから、未発見の絵画土器の存在が予想され“見直し”作業を行うことになりました。現在も丹念に土器の表面を洗い、見直す作業が進められています。今回は大中遺跡で未発見の絵画土器など、中間報告をかねて成果を報告します。

見直し作業協力者

播磨町郷土資料館ボランティア
溝口　操、古川　一、牛島三夫

兵庫県立考古博物館ボランティア
山本裕恒、増田倫敏、髙橋　宏、加藤眞由美、影山静男、坂井勝代、佐藤修三、寺田文男、中川恵子、林　信吾、松岡信孝、山岸一男、和辻義昭

播磨町立播磨中学校トライやるウィーク参加生徒
佐伯卓也、藤原直之、妻鹿弘大、足立悠翔、大江唯斗、柏原　蓮、小寺紘貴、藤澤大介

遺物洗浄は播磨町郷土資料館ボランティアの希望者を対象に作業を始めましたが、兵庫県立考古博物館ボランティアも後に参加し、双方で洗浄作業をすることになりました。しかし大中遺跡の土器は表面に土が密着して、難しい洗浄作業になるため、双方のボランティアが統一的に遺物洗浄できるように全体説明会を開催しました。

全体説明

ボランティアの手によって丹念に洗浄された遺物は学芸員の目によって遺物の一点一点を観察し、土器や石器その他に分けられ、意図的に描かれた絵画土器の破片がないか確認します。中には土器づくりの際に表面を調整する工具が当たったものなど、判断が難しいものもあります。

見直し

明らかに絵画と思われる線が描かれた土器が発見されることがあります。右の写真は「龍１」が発見された時の土が着いた状態です。洗浄作業中にボランティアが気づき、にっこりしながら持ってこられる場合もあります。また洗浄中に気になる遺物は小箱に入れることにしていて、そこから発見される場合もあります。土器の表面にこびりついた土の下には想像以上の世界が描かれているのです。

発見

絵画土器が発見されれば土器全体の形が分かるのか、またどのように絵が描かれているのかなどを細かく観察して、長さや厚さなどを計って実測図を作成します。この実測図は全体の形を復元する基礎資料になるほか、今後作成される正式な報告書の図としても利用します。それだけに慎重な作業です。

実測

絵画土器の破片が土器全体のどの部分にあたるのか想像がつく場合があります。その場合は実測を行い、これまでの出土例などを参考に全体の形を想像します。郷土資料館の土器づくりで指導いただいている小谷義男さんにお願いして思い通りの復元土器を制作していただいています。

復元

新発見の遺物（中間報告）

大中遺跡の見直し対象の遺物は93箱であるが、令和４年７月末時点で半数の見直しが完了している。今回、特別展に合わせて今まで明らかになった絵画土器、石器、自然遺体を中間報告する。

龍１　３片の破片が確認されており、１箇所の接合部がある。頸胴部の屈曲部から胴部上半にかけての部位で、全体形は大形で広口壺と考えられる。絵画は胴部上半にヒレや胴体の一部を描いている。線の先が２～３本に分かれたヘラあるいはクシ状の工具が使用されている。モチーフは胴体の一部と思われるやや蛇行する線と三角形の一部がやや屈曲を意識するヒレが３箇所以上表現されている。胴部の表現が曖昧であることから、抽象化段階のものと考えられる。

龍２　１片の大型片である。胴部がそろばん玉形になり、中型の長頸壺と考えられる。先が２～３本に分かれた工具で、脚部が下方にやや丸みを帯びながら三角形のヒレを２箇所描き、右方に平行な線での胴部を表現している。龍の頭、胴や脚が省略されており、龍変遷の記号化する直前の抽象化段階と考えられる。

龍３　１片の小片で、表裏とも丁寧にナデ調整された壺胴部片である。横位に２本のヘラ状工具で曲線ぎみの胴部を表現している。そのヘラガキ線から下方に２本のヘラガキ曲線でヒレを表現していると思われる。龍文様変遷の抽象化段階と考えられる。

龍４　１片の小片である。表裏とも丁寧にナデ調整された壺胴部上半と思われる。上方は割れ口から下方に細い線が尖るように龍のヒレを描いたものである。なお細線は鉄製の針で描かれたと考えられるほど細い。龍文様が記号化した段階のものと考えられる。

女性器１　壺胴部上半の破片と思われ、表裏とも器面が残っておらず赤みを帯び剥落している。表面に巾1.5mmの棒状工具で女性器と考えられる木の葉状の絵画が描かれている。その下方中央に１点の刺突があり、左右に曲線の線が伸びることから股の表現と思われる。この土器は弥生時代後期から終末期の所産であり、各種の土器絵画がデフォルメされる時期にあたる。奈良県田原本町「唐古・鍵遺跡」出土の中期末の鳥装絵画に小さな女性器が描かれている。本例は後期にデフォルメされ、その部分が大型になったものと考えられる。

女性器２　壺胴部上半の破片で、長さ1cmの木の葉状の女性器が細線で単体が描かれる。省略化された段階で、小形に描かれたものである。

石器（１～13）　剥片１点、削器１点、ハンマー１点、砥石５点、磨石４点、台石１点がある。剥片はサヌカイト製で旧石器の可能性があり、削器は鉄石英製と考えられる。１以外は礫や板石を利器として使用し、その痕跡を残すものである。

絵画土器等一覧

番号	種別	コンテナ№	出土地等	規模（高さ・幅・厚さ）mm	機種等
龍１	絵画土器	N2-13④ N3-13⑤	第１土器群 不明	67×94×10 55×63×10	広口壺胴部上半 ２片同一個体
龍２	絵画土器	N1-4④	第１土器群	75×121×6.6	長頸壺胴部上半
龍３	絵画土器	N4-11⑦	不明	29×24×4.8	壺胴部上半
龍４	絵画土器	N4-11⑫	不明	38×28×5	壺胴部上半
女性器１	絵画土器	N3-9⑱	不明	40×34×6	壺胴部上半
女性器２	絵画土器	N2-8⑩	91号住居	45×45×7	壺胴部上半
モモ１	堅果類	N2-6⑥	SH1101 東南ピット	13×11×2	核破片

自然遺体　縦13mm、横11mm厚さ２mmで、モモの核が炭化し、剥離したものである。大中遺跡では種子の報告例がなく、植物遺存体は初例である。奈良県纒向（まきむく）遺跡ではモモの種子が２千点以上出土した例があり、祭祀用と考えられている。今回の大中遺跡例は１点であるが、乾燥と湿潤が繰り返される自然遺体の遺存状況が悪い環境にあって、検出されたことは他にも多数存在していたことが想像でき、食糧・祭祀などを考える上で貴重な遺物である。

図　絵画

龍 1
復元品

龍 3

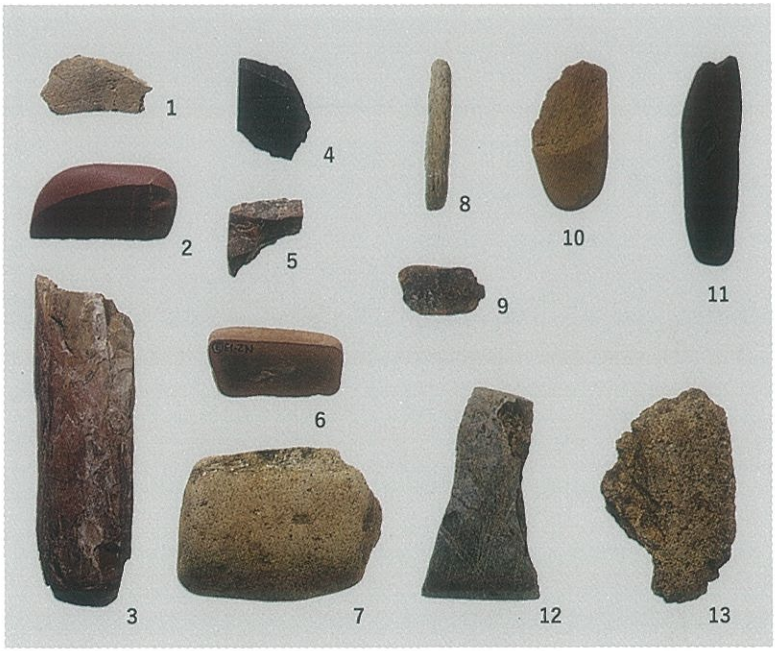
龍 4

龍 2
復元品

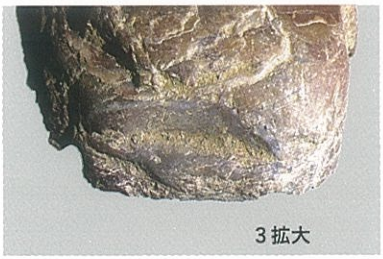
女性器 1

女性器 2

石器　自然遺体


1
4
8
10
11
2
5
9
6
3
7
12
13

2 拡大

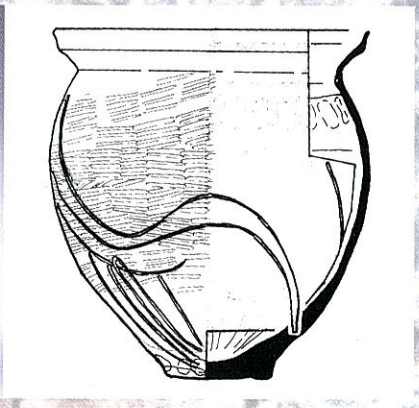

3 拡大

モモ 1

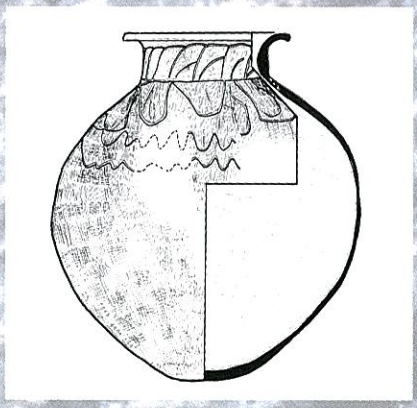
4
側面

龍の祈り　播磨から摂津

龍　絵画土器



玉津田中遺跡　龍　絵画土器甕（提供 兵庫県立考古博物館）　高さ 16.0 ㎝



玉津田中遺跡　龍　絵画土器壺高さ 30.5 ㎝
（神戸市報告を一部改変）

大中遺跡　龍１　高さ 6.7 ㎝

●大中

播磨

摂津

●郡家

●雪御所

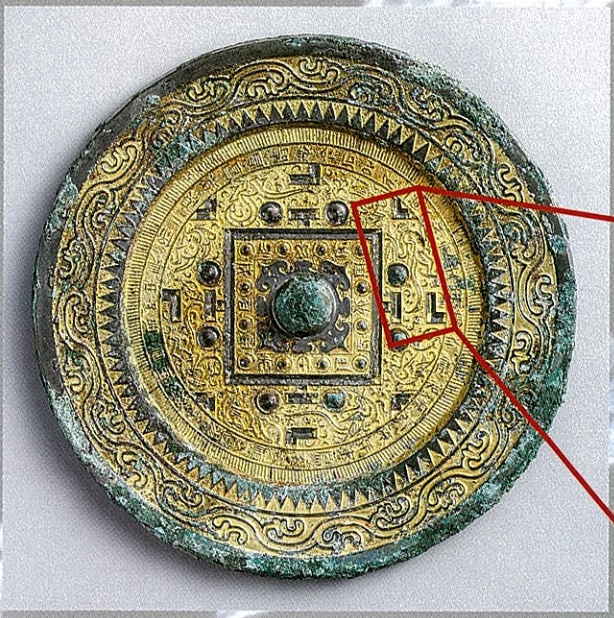
●玉津田中

●大手町

龍は中国の東北地方で、約８千年前生まれたとされる空想上の生き物です。主に前漢代後半から新、後漢代に青銅鏡に文様化されました。龍は水を治め、国を制することに通じていますので王の象徴としても扱われました。

日本では社寺の手水などでよく見かける「龍」。この龍は鏡の文様の一部として弥生時代後期に中国からもたらされました。弥生時代中期後半の土器に絵を描く風習が多くなり、その習慣に組み入れられて弥生時代後期前半に龍が描かれました。日本では約 200 例があります。

中国鏡に鋳出された龍



鍍金方格規矩四神鏡
兵庫県立考古博物館蔵〔千石コレクション〕直径 16.4 ㎝　新（後漢）

龍の絵画は土器に描かれる段階で脚は省略され、主にヒレ状の線刻や頭部、胴体、尻尾で表現されました。やがて龍の文様は全体を写実的に表す「具象」から一部を抜き出し誇張する「抽象」、さらに単純な線による「記号」へと変化しました。

龍の祈り　摂津から河内・和泉

（側面）
口径約 20 ㎝

（底面から）

大手町遺跡の龍（提供 神戸市）

（側面）
口径約 9 ㎝

（底面から）

雪御所遺跡の龍（提供 神戸市）

（胴部）
幅約 18 ㎝

郡家遺跡の龍（提供 神戸市）

河内

池上曽根遺跡の龍（アップ）

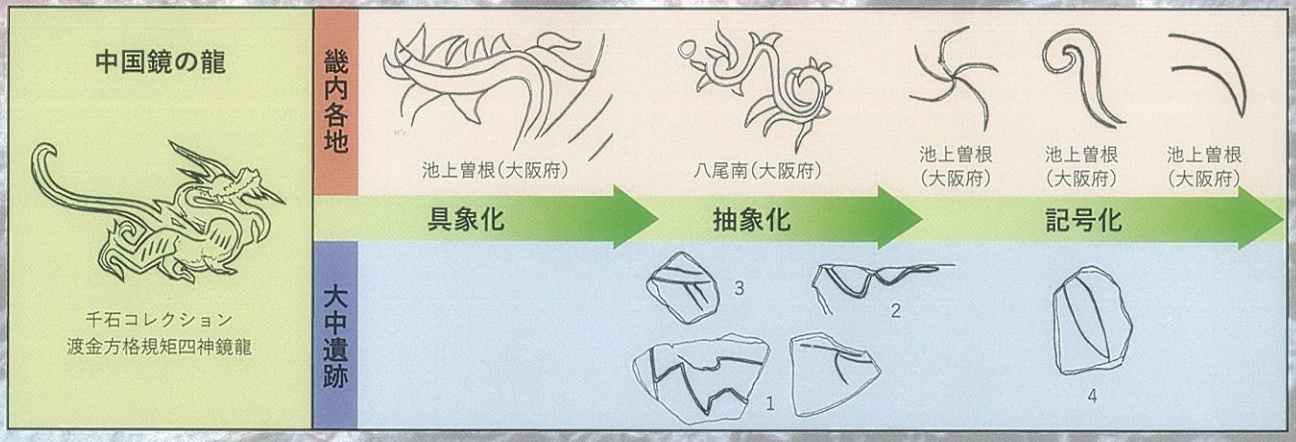
高さ 25.0 ㎝

池上曽根遺跡の龍
（提供 大阪府立弥生文化博物館）

●池上曽根

和泉

◇ 変わりゆく龍



◇ 今に生きる龍

龍樋
（首里城 沖縄県）

龍の吐水口
（無量壽院 播磨町）

外面
珉平焼　黄南京龍文鉢（個人蔵）

見込み

近代のタイルに彫り出された龍（二枚組）
（Danto Tile ㈱ 蔵）

シャーマン（巫女）の祈り　播磨から摂津

◉大中

内行花文鏡片　幅 6.2 ㎝

鏡形土製品　幅 4.7 ㎝

鳥形土製品　長さ 7.7 ㎝
祭祀関係置物（大中遺跡）

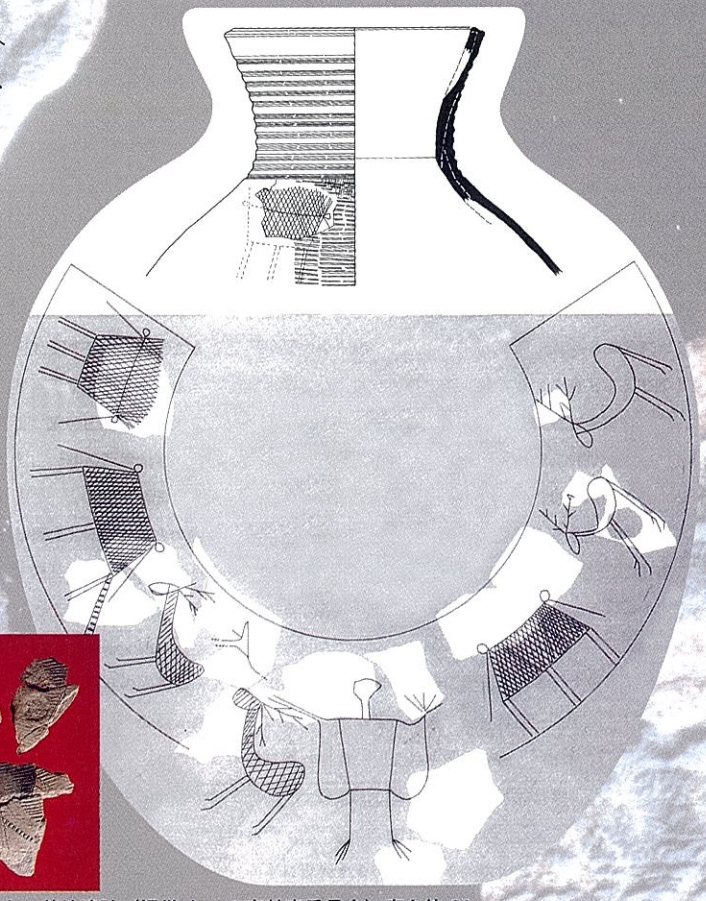
播　磨

女性器が描かれたイイダコ壺
今山遺跡
（提供 福岡市教育委員会）
高さ約 9 ㎝

大中遺跡では弥生時代後期後半から終末期の土器に女性器が描かれた絵画土器が２点発見されました。この種類の絵画土器は畿内で３例ありますが、畿外では初例と考えられます。

弥生時代の類例として、唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡（奈良県田原本町）では弥生時代中期末（１世紀）の大型壺の胴部に全周にわたり鹿・人物・建物が描かれている土器が発掘されました。その中で両手を大きく広げ鳥のような服装をする人はシャーマン（巫女（みこ））と考えられ、下半身には女性器が小さく描かれています。両手を大きくひろげた鳥装人物絵画は全国で約 20 例ありますが、男女の存在が明らかになっています。

内行花紋鏡と鏡台　新（後漢）
兵庫県立考古博物館蔵〔千石コレクション〕
鏡直径 27.2 ㎝



土器群出土絵画土器　養久山・前地遺跡（提供 たつの市教育委員会）高さ約 20 ㎝

シャーマン（巫女）の祈り　摂津から河内・和泉・大和

女性器１　絵画土器（大中遺跡）
高さ４㎝

女性器２　絵画土器（大中遺跡）高さ 4.5 ㎝

大中遺跡の例は弥生時代後期後半から終末期の壺胴部の破片で、土器の絵画が省略・誇張・変形などデフォルメ（意図的に変化）される時期にあたります。中期末の鳥装人物の絵画に描かれた小さな女性器が後期にはその部分が大きく表現されるものと、小さく単独で描かれたものがあります。この発見は邪馬台国の卑弥呼がいた同じ時代に大中遺跡でも女性シャーマンがいたことを証明するものです。この女性シャーマンが作物の恵みや雨乞いなど、制水等を占う祭祀も司ったものと考えられます。

摂津

河内

八尾南●

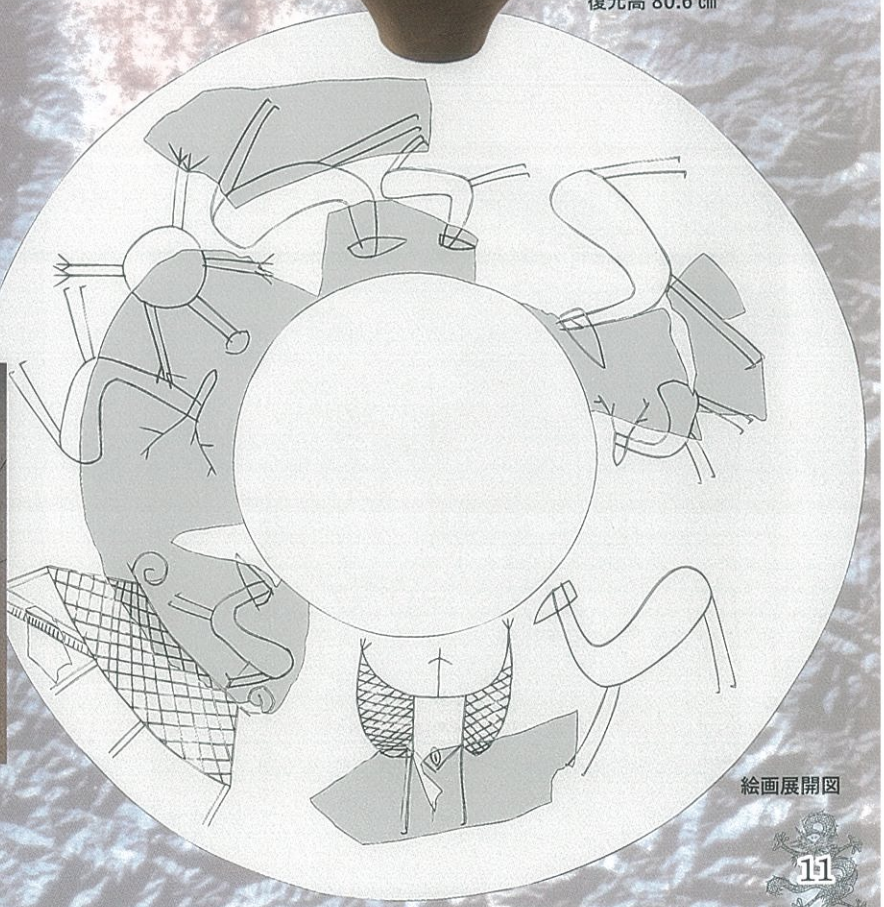
大和

唐古・鍵●

唐古・鍵遺跡 絵画土器 001
（提供 田原本町教育委員会）
復元高 80.6 ㎝

和泉

女性鳥装人物写真



絵画展開図

土器づくり

大中遺跡の土器は使われていた時は整った形で、表面がきれいに仕上げられた土器だったことは土器の見直しで分かってきています。しかし長期間にわたり土に埋まり湿気と乾燥が繰り返され、表面が剥がれていったものも多数あります。そこで当時の輝きをもう一度再現するために土器づくりの体験が永年続けられています。

この展示では小谷五郎さんと小谷義男さんが作り続けてきた作品の数々をご覧いただくとともに、弥生人の土器づくりへの思いを想像していただければと思います。

古代窯で土器を焼こう（2022 年）

タコ漁

イイダコ漁

大中遺跡の弥生人は水田で稲を作っていたと考えられますが、水田やお米づくりの道具は今のところ見つかっていません。その一方、「イイダコ壺」はたくさん出土しています。弥生時代の海岸線は現代の埋め立て前の海岸線とあまり変わっていないと考えられますので、大中遺跡から直線で約2km離れていたと思われます。イイダコは海岸線近くでもとれるのですが、秋から春頃に舟を漕ぎだして、沖合に位置する鹿ノ瀬などの浅瀬でイイダコ壺を縄にくくり、海底に沈めてイイダコをとっていたのでしょう。遺跡からはたくさんのイイダコ壺が出土していることから、弥生人の大切な食糧だったと考えられます。また漁を終えたイイダコ壺はそのままムラまで持って帰って穴の中に保管されていますので、大切にしていた証拠です。

弥生グルメ体験（2015年）

タコ壺に縄をつなげた復元写真

イイダコ漁　画：小東憲朗

機織り

機織り風景　画：小東憲朗

播磨町郷土資料館では弥生時代の生活を復元するために、ボランティアを中心に体験実習を行っています。その中で根強い人気は機織り体験です。遺跡を発掘しても服などの繊維は殆ど出土しませんが、機織り具は出土することがあります。しかし、いまだにどのような服装をしていたのか不明な部分もあります。中国の歴史書である『三国志』「魏書東夷伝倭人条」では倭人（弥生人）は頭を通すようにできた貫頭衣や一枚の布を腰に巻いて前で結ぶ横服衣を着ていたと書かれています。郷土資料館では糸の材料になる「カラムシ」を育て、その茎の繊維から糸に仕上げて、機織りをしています。各地で出土する機織り具から組合せを考えて服を織っていきます。カラムシを収穫してから３か月もかかってようやく一着の貫頭衣ができるのです。たいへん苦労して服をつくることが復元体験によって分かってきました。

まもり、活かす

未来

遺跡の将来像も様々な分野から検討され、地域に愛され、活かされる大中遺跡をめざそうではありませんか。

現在

大中遺跡にはまだまだ解明されていない部分がたくさんあります。国史跡としてしっかりまもりながら遺跡の実態解明に向けて官民協働して今後も進めなければなりません。

過去

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見され今年で60年を迎えます。発見直後から地元の方々や研究者の熱意により1800年の眠りから覚めた遺跡は国指定史跡に指定され、そして遺跡整備が進み住民に親しまれてきました。当時を知る世代も交代する中、地元愛が伝わる遺跡秘話ヒストリーもたくさんありそうです。遺跡と共にこれらも永久に引き継いでいかなければなりません。

未来

2020年
遺跡発見
60周年

現在

2007年
県立考古
博物館開館

1990年
大中遺跡
まつり開始

1985年
郷土資料館
開館

1974年
播磨大中古
代の村開園

1967年
史跡指定

過去

1962年
遺跡発見

考古学年表

◎：国指定　○：県指定　△：市・町指定

年代	時期区分		播磨町・播磨地域の主な遺跡など
	旧石器時代	前期	
3万年前		中期	藤江川添遺跡（明石市） 西八木遺跡（明石市）
B.C14000		後期	△大中遺跡（播磨町）・山之上遺跡（加古川市）／石器 西脇遺跡（明石市）
B.C7000	縄文時代	草創期	
B.C4000		早期	○福本遺跡（神河町）
B.C3000		前期	△大歳山遺跡（神戸市）
B.C2000		中期	丁・柳ケ瀬遺跡（姫路市） 片吹遺跡（たつの市）
B.C1000		後期	
B.C600		晩期	日笠山貝塚（高砂市）
B.C300		（早期）	今宿丁田遺跡（姫路市）
	弥生時代	前期	新方遺跡（神戸市） 美乃利遺跡（加古川市）
A.D.1		中期	玉津田中遺跡（神戸市） 養久山・前地遺跡（たつの市）
		後期	
		終末期	◎大中遺跡 住居／土器 西条52号墳（加古川市）
300	古墳時代	前期	○養久山1号墳（たつの市） ◎丁瓢塚古墳（姫路市） ◎吉島古墳（たつの市） ◎西条古墳群（加古川市）
400		中期	◎五色塚古墳（神戸市） ○愛宕塚古墳 ◎西条古墳群（加古川市） ◎石の宝殿及び竜山石採石遺跡（高砂市）
500		後期	○西宮山古墳（たつの市） 平荘湖古墳群（加古川市）
600	飛鳥時代		◎鶴林寺（加古川市）
700	奈良時代		◎播磨国分寺跡（姫路市） 古大内遺跡（加古川市） 古代山陽道推定地 ○西条廃寺（加古川市）
800			太寺廃寺（明石市）
900	平安時代		
1000			
1100			魚住古窯址群（明石市）
1200			福田片岡遺跡（たつの市）
1300	鎌倉時代		
1400	室町時代		◎鶴林寺本堂（加古川市） ◎白旗城跡（上郡町） 本荘蓮花寺構居跡濠跡／青磁など 城山城跡（たつの市）
1500	戦国時代		◎感状山城跡（相生市） ◎置塩城跡（姫路市）
	安土桃山時代		
1600	江戸時代		◎姫路城跡（姫路市） ◎明石城跡（明石市）
1700			今里傳兵衛／新井用水
1800			梅谷七右衛門／庄屋職 ○高砂堀川湊及び工楽松右衛門旧宅（高砂市） ジョセフ・ヒコ／新聞発行
1900	近代・現代		別府鉄道／開通 ◎播州葡萄園跡（稲美町）
2000			

大中遺跡の祈りとくらし
－60年目の新発見－

令和4（2022）年10月4日発行

編集・発行　播磨町郷土資料館

〒675-0142
兵庫県加古郡播磨町大中1-1-2
TEL 079-435-5000
FAX 079-436-0135

印刷：明光印刷株式会社

[ホームページ]